

やまと 民俗への招待

鹿谷 熱

生駒十三塚の十三塚は、1933年の発掘調査の結果、ほとんど出土品もなく、墳墓ではなく民間信仰上の「塚」だろうとされた。では、その民間信仰とはどのようなものだったのだろう。

84年から85年にかけて、十三塚所在地の平群町教育委員会の村社仁史技師と共に、この塚について資料を集め、聞き取り調査を繰り返した。

坂野伊良さん(福貴畠、1917年生まれ)によると、大阪の融通念佛宗の本山大念佛寺が、本尊十一尊天得如来の画像を捧持して年に一度、檀信徒の家を廻る。「これを『如来サン』とか『御回在』と呼ぶが、この一行が十

三峠を通ると、十三塚に人が埋められており、僧侶の身で助けられなかつたので、以来この道を通りなくなったのだとい

う。

露野寅治郎さん(同、1902年生まれ)は、

ヒフリを再現するために神社に集結した福貴畠の人々(1980年)。筆者提供

森田一夫さん(同、1914年生まれ)による

と、日照りの年にはます

神主がヒフリ(火振り)をするので、雨を降らし

てほしいという願を2、

3日かけ、その間は燈明をあげ、その後、日暮れにヒフリをした。

竹やタネギ(菜種殻)を束にして家ごとに一本ずつ

松明を作り、村人総出で

杵築神社から、太太鼓を打ち鳴らしながら「ヒ

フレ、タンモレ」と日々

に叫び、十三峠まで登り、

ここから十三塚の周囲をぐるりと廻った。その後、

畔に龍神をまつるジョー

サン池(龍王池)に松明

を投げ込んで火を消す。

ヒフリの松明は70、80本も集まつたという。

雨乞いの願掛けは、雨

を降らしてくれたら、そ

の御礼として、山のきれ

いな砂を境内に敷き詰

めるスナモチをすると

か、神社境内で踊りを

する、また獅子舞を雇

つくるなどの具体的

な事柄を事前に決めてお

き、これを紙に書いて

丸めて神前に供えてお

く。これを杉の丸箸で

つり上げて御礼に行うこ

とを決めたという。ヒフ

リをすると妙に雨が降つ

たという。



古学者の梅原末治は、古來この塚は安産の神として信仰され、妊娠の祈願が多かったといい、願掛けする者は白の小さな

紙の旗を献じて祈り、お

礼参りの際は赤旗をささ

あるとされていたが、福

貴畠の集落では昭和10年

いた。

安産祈願や雨乞い伝承

民俗文化研究所代表

次回8月4日